

5 . 中国経済のエネルギー事情

本調査は改革・開放以降の統計と 2005 年初めまでの各種公式報道を中心にして中国のエネルギー事情を分析したものである。中国は改革・開放以降、年率 9%を超える経済成長をつづけてきたが、この間のエネルギー事情も大きな変化をみせた。

建国当初から現在まで一貫して不足していたのは電力だけで、石炭については需要を満たしていた時期と不足していた時期があり、石油は 1980 年代までは余裕があったが、1990 年代に入ると純輸入国に転じ、2000 年以降は大量輸入が始まり、海外依存度は年々高くなっている。

1980 年代までのエネルギー政策は海外に依存するという選択肢はなかったものとみられるが、経済成長とともにエネルギーへの需要は急増した。とくに石油については既存油田が衰退期に入り 1990 年代半ばからは純輸入国となり、2000 年以降は輸入依存度が急速に高まりつつある。

今後も高度経済成長をつづけるという目標を提起しており、エネルギーの需要は高まるばかりだが、高すぎる成長は多くの矛盾を生み出している。2004 年には各地で深刻な電力不足や石油価格、石炭価格の高騰がみられ、産業や生活に大きな影響を与えている。

過去の中国経済は国際経済の動向はほとんど関係がなかったが、現在は世界が中国経済に影響される時代になっており、否応なく国際化が進展することになる。

本調査ではエネルギー全般、石炭、石油・天然ガス、電力に分けて資源と開発、投資、需給、設備、価格、貿易など必要と思われるエネルギーに関連するデータを集め分析したものである。データのほとんどは中国が公式に発表したものだが、資料によって連続性、整合性がみられないものもあり、より新しく発表されたものを優先した。

文章のなかではわかりやすく説明するために、できるだけ多くのグラフ、地図を用い、1980 年以降の主要な統計についてはまとめて添付したが、中国のエネルギー事情をみるために公表している重要なデータはほとんど掲載した。